

令和7（2025）年度

教職課程

自己点検評価報告書

川村学園女子大学

令和 8（2026）年 3月

川村学園女子大学 教職課程認定学部・学科（免許校種・教科）一覧

学部	学科	幼稚園一種	小学校一種	中学校一種	高等学校一種	栄養教諭二種
文学部	国際英語学科			英語	英語	
	史学科			社会	地理歴史	
	心理学科				公民	
	日本文化学科			国語	国語	
教育学部	幼児教育学科	○				
	児童教育学科		○			
生活創造学部	生活文化学科			家庭	家庭	○

大学としての全体評価

川村学園女子大学では、建学の理念である「自覚ある女性」「社会への奉仕」の実現のため、教員養成に力を注いできました。大学全体では自己点検を重ねて来ましたが、教職課程に特化した自己点検も4年目となりました。本年も概ね目標を達成しており、自己点検としては合格と判断します。

しかし各養成課程の特徴ある、効果を生んでいる教育実践が、教員間で全ては共有されていないという課題は依然存在しています。その改善に早急に取り組む必要があります。ICTの活用も益々図る必要があります。

このような課題発見のためにも、今後も、自己点検を含めたPDCAをよりよく展開していきたいと考えております。

川村学園女子大学

学長 西川 誠

目次

I	教職課程の現況及び特色	1
II	基準領域ごとの教職課程自己点検評価	3
	基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な 取り組み	3
	基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援	7
	基準領域3 適切な教職課程カリキュラム	10
III	総合評価	13
IV	「教職課程自己点検評価報告書」作成プロセス	14

I 教職課程の現況及び特色

1 教職課程の現況

- (1) 大学名：川村学園女子大学
 (2) 学部名：文学部・教育学部・生活創造学部
 (3) 所在地：千葉県我孫子市下ヶ戸 1133 番地
 (文学部：史学科、心理学科、日本文化学科)
 (教育学部：幼児教育学科、児童教育学科)
 (生活創造学部：生活文化学科)
 東京都豊島区目白 3-1-19
 (文学部：国際英語学科)
 (4) 教職課程の履修者数及び教員数

①教職課程の履修者数

課程等（通学）

令和7年度（令和7年5月1日現在）

学部	学科名	教科	免許種	教職課程履修者数				合計
				1年	2年	3年	4年	
文学部	国際英語学科	英語	中学1種	2	1	0	0	3
			高校1種	2	1	0	0	3
	史学科	社会	中学1種	4	3	4	1	12
		地理歴史	高校1種	5	6	4	1	16
	心理学科	公民	高校1種	0	0	0	1	1
	日本文化学科	国語	中学1種	3	3	4	2	12
高校1種			6	3	4	2	15	

学部	学科名	教科	免許種	教職課程履修者数				合計
				1年	2年	3年	4年	
教育学部	幼児教育学科	幼稚園	1種		12	9	22	43
	児童教育学科	小学校	1種		5	4	9	18

学部	学科名	教科	免許種	教職課程履修者数				合計
				1年	2年	3年	4年	
生活創造学部	生活文化学科	家庭	中学1種	7	3	8	3	21
			高校1種	7	3	8	3	21
		栄養教諭	2種	0	0	1	2	3

② 教員数

	教授	准教授	講師	助教	その他
教員数	34	7	8	0	0
備考：					

(5) 卒業者の現況
課程等（通学） 令和6年度卒業生（令和7年5月1日現在）

教科	免許種	就職先状況											
		認定こども園		幼稚園		小学校		中学校		高等学校		特別支援学校	
		正規	他	正規	他	正規	他	正規	他	正規	他	正規	他
英語	中学1種							1					
	高校1種												
社会	中学1種												
地理歴史	高校1種												
公民	高校1種												
国語	中学1種							2	2				
	高校1種									1	1		
幼稚園	1種	2		2									
小学校	1種					7							
家庭	中学1種							3	2				
	高校1種												

2. 特色

川村学園女子大学は、文学部、教育学部、生活創造学部の3学部（8学科）、大学院人文学研究科（2専攻）から成る私立総合大学である。我孫子キャンパスと目白キャンパスの二つのキャンパスで、473名の学生が学んでいる。小規模の大学だからこそ可能なきめ細やかで丁寧な教育を特色としている。教職課程においても少人数での指導が中心であり、このことは、後述する自己点検評価においても明らかなように、本学の教職課程で学ぶ上での大きなメリットとなっている。教職課程は、上記の通り設置されている。

毎年の教員免許状取得者は年度によってばらつきはあるものの、およそ100名程度で推移していたが、今年度は50名程度となっている。このうち教育学部の卒業生を中心に教員を輩出している。そのほとんどが千葉県や茨城県で教職に就いており、地域社会の発展に寄与している。

さらに本学では、所属する学科において取得できる教員免許を基礎免許として、副免許を取得することも可能である。この制度を利用して毎年複数の学生が二つの免許を取得している。この制度は、現在、教員養成改革において小学校教諭と中学校教諭の両免併有が促進されていることに鑑みても、学生の教職キャリア支援に資する、本学の教職課程の特色と言える。

II 基準領域ごとの教職課程自己点検評価

基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

基準項目 1-1 教職課程教育の目的・目標の共有

〔現状〕

川村学園は、大正 13 (1924) 年川村文子によって創設された「川村女学院」を母体とし、「感謝の心」を基盤とした「自覚ある女性」の育成による「社会への奉仕」を教育理念として教育活動を行ってきた。昭和 63 (1988) 年に開設された川村学園女子大学もこの理念を受け継ぎ、女子教育に携わってきた。知的能力の向上を前提として学生個々の人間性の調和ある発達と自らの社会的使命を自覚し社会の有用な一員になり得る人材養成を目指している。この建学の精神に基づき、本学教職課程では、「教員としての基礎・基本となる教育能力を身につけた優れた教員の養成」を掲げおり、高度な専門性を備えた実践的指導力のある教員養成を行うことを目標としている。

学生への共有は、教職課程の目的・目標を 4 月の教職課程ガイダンスで説明をするとともに、教職課程科目の授業の中でも授業担当教員から分かりやすく説明を行い、理解と周知徹底を図っている。教員間においては、定期的に学科会議を開催しており、教職課程の連携に努めている。

〔優れた取組〕

教職課程の目的・目標を共有するために、学科ごとに実習担当教員ミーティングや勉強会など情報共有をしている。また、FD による全学的な情報提供も行っている。

教育課程において、教育の目的・目標に関しての特色は以下の通りである。

文学部国際英語学科では、英語力と国際的な視点を備えたコミュニケーション力をもち、生徒たちに英語運用能力だけでなく、異文化への関心や理解、国際社会を見る目を身につけさせることができる教員の育成を目指している。史学科では、各地域・時代の歴史・地理に関する知識を基に、現代社会の諸問題の解決に応用し得る実践的スキルと創造的思考力を身につけ、歴史学地理学を学習することの個人的社会的な意義を伝えられる教員養成を目指している。心理学科では、人および社会の特質、成り立ちと今日の問題について学習し、現代の社会とそこに生きる人間をよく理解し教育できる教員の育成を目指している。日本文化学科では日本の文学、言語、伝統・文化を深く理解し、様々な視点から日本文化を捉えられる国語科教員の育成を目指している。

教育学部幼児教育学科では、幼児教育者としての専門性だけでなく人間として生きる基礎力を有し、幼児および保護者への共感的理解のできる教員の育成を目指している。児童教育学科では、学校における問題が多様化・複雑化するなかで、時代に対応した実践力のある小学校教員を育成することを目指している。

生活創造学部生活文化学科では、生活者・消費者として生活全般を見渡せる社会学的素養と豊かな生活を創造する実践力を有し、現代社会が抱える生活の諸問題を考察し、問題解決ができる家庭科教員育成を目指している。栄養教諭の養成においては、児童生徒を取り巻く課題を踏まえ、望ましい食習慣の形成を促し、食文化の継承、自己管理能力の育成豊かな心、社会性を身に付けた教員の養成を目指している。

また、学習成果の可視化を行うにあたり「教職課程履修カルテ」を有効活用している。学生自身で自己評価を行い、所定の指標についてどれだけ身についたかが把握できる仕組みとなっている。

〔改善の方向性・課題〕

上述のように、大学全体で教職に関して共有する機会を設けている。しかし、学科間での学生に関する情報提供や意見交換の場が設けられていないのが実状である。今後は教職センター主催で教職担当者全員が参加できるような情報交換の場を設けるなど、検討する必要がある。

<根拠となる資料・データ等>

- ・資料 1 - 1 - 1 : 教職課程履修カルテ

基準項目 1 - 2 教職課程に関する組織的工夫

〔現状〕

本学では、2017年4月、教職センターを開設した。学生に対して履修指導、教員採用試験に向けた対策支援や情報提供、教員免許状の一括申請に関する業務、地域や教育委員会との連携等を担っている。毎年発行される『教職センター年報』において、活動報告が行われている。また、教職課程に関わる組織として、学長の諮問機関である教職課程委員会が教職課程の円滑な運営を図るために設置され、教職科目の編成や、教育実習、介護等体験など教職課程全般に関わる事項を審議している。

なお、ICT教育環境に関しては、強化にも注力しており、PC、iPadやデジタル教科書を活用した授業を展開している。教職課程の質向上に関して、授業評価アンケートを実施するほか、年に1回、FD研修を行い、教職担当教員以外の教職員の理解を深める重要な機会となっている。また、全教員が前・後期提出するティーチング・ポートフォリオも、授業改善に資する取り組みとなっている。

〔優れた取組〕

教育実習の実習校訪問については、原則としてゼミ担当教員が実習校を訪問し、実習後においても、教育実習担当教員とともに、学校全体として協働してフォローアップを行っている。実習生に緊急の問題が生じた場合には、教職センター、教育実習担当者、ゼミ担当で協議したうえ、対応に当たることにしている。

〔改善の方向性・課題〕

教職課程の更なる向上のため、理念や教師像を共有し、それに向けた教育に関する情報を得るには、現在実施している授業評価アンケートの質問項目では不十分である。通常のアンケートとは別に教職課程に特化したアンケートを行い、学生の意向を把握し、より実質的な授業改善につなげていくことが今後の課題となる。

また、教育現場では、ICT機器を使用して授業を行うことが求められているため、それらの機器を使いこなせるような指導を模擬授業や講義を通して行う必要がある。本学では、PC、iPad、Microsoft Teamsを活用した資料配付を行う科目は複数あるが、電子黒板を利用する科目は、「理科教育法」だけである。また、デジタル教科書を取り扱う科目も、「理科教育法」「算数科教育法」「家庭」などに限られる。現在、ICT環境の導入が急速に進んでおり、教育環境の充実を進めていく必要がある。

<根拠となる資料・データ等>

- ・資料 1-2-1 : ティーチング・ポートフォリオ
- ・資料 1-2-2 : 教職センター年報 9号
- ・資料 1-2-3 : 川村学園女子大学 教職課程委員会規程
- ・資料 1-2-4 : 川村学園女子大学 教職センター規程

基準領域 2 学生の確保・育成・キャリア支援**基準項目 2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成****〔現状〕**

教職課程の状況提供について、新入生に対しては、入学式に資料を配布し教職課程を周知する説明をしたり、ガイダンス期間中に教職課程及び履修についてのガイダンスを開催したりしている。その他、大学のホームページにおいて、教員養成の取り組みに関する記事や教員採用試験の合格率などを掲載し、本学の教員養成への熱意を伝えている。

また、教育実習受講資格の条件があり、各学科の特性により多少の違いはあるが、GPAをクリアする基準等が示されている。教職課程委員会において、それらの条件について、学生一人ひとりについて確認が行われ、受講継続についての審査を行っている。

〔優れた取組〕

本学の特徴として少人数教育による細やかな指導を挙げることができる。教員が各学生の資質を把握し、それに応じて教員が適宜、面接指導などの教職指導を行っている。頻繁に面談等を行うことにより、教職辞退者を最小限に抑えている。

教職センターは、いつでも学生が相談できる体制となっている。教職関連書籍等（教職に関連する書籍、教員採用選考試験過去問題集など）の貸出も行っている。

〔改善の方向性・課題〕

教職課程を目指す意識の高い学生を確保するために、各学科において取得可能な教員免許状の種類や教員の魅力、副免許についてなど、入学式での周知により一定数の人数を確保することができた。昨今、児童生徒の多様化に伴う対応が難しくなっている現状を鑑み、学校現場で即戦力となるための強化がますます必要となってくる。

<根拠となる資料・データ等>

- ・資料 2-1-1 : 川村学園女子大学『履修案内 2025 年度』 pp. 133-136

基準項目 2-2 教職へのキャリア支援

〔現状〕

本学では、最終的に 50 名程度の学生が教員免許状を取得している。教職へのキャリア支援として、教員採用試験対策講座を夏季と春季、年に 2 回開催している。事前に教員採用選考試験の受験希望先調査を行い、受験先に合わせた指導を行っている。講座は、教職に対する関心を維持・向上させ教職就職へ繋げられるように組まれている。

自治体で募集している学校ボランティアや教職たまごプロジェクトに参加することを推奨しており、学生は積極的に応募している。児童教育学科では、卒業生が集う機会である G オフィスを定期的に開催しており、教員として活躍している卒業生の現場の話を聞くことを通して、教職の魅力を伝える取組を行っている。

〔優れた取組〕

本学の特色は、教職への関心を持ち、教職就職への意欲の向上のため、1 年次から教員採用試験対策講座への参加を奨めている。また、毎年、夏休みには教員採用試験二次対策講座として、受験地の自治体に合わせて「模擬授業」、「集団面接」、「個人面接」、「論作文対策」等を小学校や、中学校、特別支援学校での教職経験を持つ教員を含めた教職センター所属の教員が一丸となって指導を行っている。こうした取り組みによって、本学の令和 7（2025）年度の教員採用試験の合格率は、中高教員採用試験一次合格率 90.0%、二次合格率 55.6%、小学校教員採用試験一次合格率 100%、二次合格率 100%であった。また、教員採用試験の早期化にも対応し 3 年次受験の一次合格率は、92.9%であった。

中高教職課程ならびに児童教育学科では「教員採用試験合格記」を作成し、教職課程を履修している下級生全員に配布しており、教員採用試験合格に向けての支援を行っている。また、教員採用試験不合格になった学生に対して、卒業後も教員採用試験対策講座に参加するように連絡するなど、きめ細やかな対応を行っている。

昨今、認定こども園が増加しているが、幼児教育学科では幼稚園教諭だけでなく保育士の資格も求められることを見越して、既に保育士資格も取得できるカリキュラムになっている。

〔改善の方向性・課題〕

教職のキャリア支援における課題としては、教職課程の履修者が、学年が上がるごとに減少傾向にあることであるが、教職に就く意思を持った学生の意欲を継続するための対策を講じることが急務である。

<根拠となる資料・データ等>

- ・資料 2-2-1 : 令和 7 年度「夏期教員採用試験講座」時間割
- ・資料 2-2-2 : 令和 7 年度「春期教員採用試験講座」時間割
- ・資料 2-2-3 : 「教員採用試験二次対策講座」実施要領

基準領域 3 適切な教職課程カリキュラム

基準項目 3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

〔現状〕

建学の精神に基づき、「自覚ある女性として社会に奉仕できる教養人を養成する。」という理念のもと教育課程カリキュラムを編成している。「教育の基礎的理解に関する科目等」は、「教職課程コア・カリキュラム」に対応した教育内容を設置している。

ICT 関連では、PC、iPad や Teams などを取り入れた適切な授業が行われている。教科教育法におけるデジタル教科書を用いた授業やパワーポイントを用いた発表などの取り組みを行っている。アクティブ・ラーニングについては、すべての教科において学習指導要領を踏まえて、学生が主体となり、模擬授業を繰り返し行っている。それに加え、毎回の模擬授業終了後に全員で批評を交わし、授業内容改善に繋げている。実際の授業実践でも児童・生徒とのやり取りや資料の読み取りについてなど、学生による相互批評の形で議論し、アクティブ・ラーニングへの意識を高めるようにしている。

本学のシラバスには、到達目標、授業の概要、授業計画、成績評価の方法、事前学習・事後学習と基準等を明示しており、「シラバス作成のためのガイドライン」をもとに作成している。

学校現場で複数の免許を取得することが求められていることから、本学では基礎免許の他に副免許を取得することができるように時間割を組んでいる。

〔優れた取組〕

本学の教職課程カリキュラムの特徴として、施行規則より多く履修させる編成となっている。こうしたカリキュラム編成は、より多くの教科に関する高い専門知識をもった教員を育てる狙いがある。

また、「学校体験活動」や「介護等体験（事前・事後指導）」は、本学において「大学が独自に設定する科目」として単位化されている。現場での学びがより深まるように「理論と実践の往還」を重視した工夫がなされている。学校体験活動では、実際に学校へ訪問をして学習支援体験を行うなど、学びを深める機会を多く提供している。これらの科目は、本学では2年次で履修することになっており、今後、中高教職課程で3年次での教育実習が行われるようになった際にも対応できるように指導が行われている。

〔改善の方向性・課題〕

ICTを活用した授業方法については、学校現場の状況を踏まえ、大学としてどのように取り組んでいくか重要課題となっている。また、教員採用試験の前倒しなどにおいても、臨機応変に対応していく必要がある。

<根拠となる資料・データ等>

- ・資料3-1-1：履修案内<2025年度>

基準項目 3-2 実践的指導力育成と地域との連携

〔現状〕

本学では、授業内外でより多くの教育現場を体験する機会を与えられるように尽力している。平成19(2007)年に我孫子市及び我孫子市教育委員会と協定を締結し、市立小中学校における学習補助としての学生ボランティアを実施しており、数多くの学生が参加している。

また、「学校体験活動」では、元養護教諭を招いたり、「介護等体験」では、市内の特別支援学校でのボランティアに参加する機会等を設けたりしている。ほかにも、地域のイベント等のボランティアに積極的に参加するように促している。これにより学生は、学校現場等での実践を通じて指導力を養う機会を得ることができる。

〔優れた取組〕

教職センター所属の教員には校長職経験者がおり、近隣地域教育委員会や小・中高等学校、特別支援学校との繋がりを持っているため、連携は大変スムーズに行われている。

本学の「教職インターンシップ」は、千葉県が行っている「ちば！教職たまごプロジェクト」や茨城県が行っている「教師塾」等に参加することを主眼とした科目となっており、現場を体験できる貴重な機会となっている。

〔改善の方向性・課題〕

「教育実習」や「学校体験活動」、「介護等体験（事前・事後）」等の教職科目や各種ボランティア等で、我孫子市内の地域や学校外との連携を通して学びの機会を充実させている。この良好な関係は、各教員がもつパイプによって維持されている。したがって、これをいかに維持し、安定したものにしていくかが今後の課題となってくる。

また、実践的指導力を高めるうえで、各種の体験的な学びは重要である。学生自身の理論と実践の往還を可能とするためにも、教員同士が連携して学生の学びを援助することが必要と考える。

<根拠となる資料・データ等>

- ・資料3-2-1： シラバス

Ⅲ. 総合評価

本学においては、3学部7学科に教職課程が設けられており、国際英語学科では中高英語、史学科では中学社会ならびに高校地歴、心理学科では高校公民、日本文化学科では中高国語、幼児教育学科では幼稚園、児童教育学科では小学校、生活文化学科では中高家庭と栄養教諭の教員免許が取得できる課程が設置されている。本学の教職課程設置の理念や教員養成の目標に従って、各学科における目指す教師像を示している。

教職課程は、介護等体験・教育実習への参加の可否や成績評価の検討をする組織として教職課程委員会を設置し、教職履修者を援護する全学的組織として教職センターを設置しており、これらが連携して教職課程を運営している。

また、キャリア支援に関しては、教職センターを中心に春・夏の教員採用試験対策講座、2次対策講座などを授業外で実施し、面接練習等の際には実務家教員を含めた多くの教員の協力を得て行っている。また、教職センターは、情報発信の機会として教育委員会から講師を招き教員採用選考に関する説明会を催している。

教職課程カリキュラムに関しては、模擬授業以外にも多くのアクティブ・ラーニングを取り入れている。

本学では、教職センターを中心に教職課程の質保証改善に取り組んできたが、ICT活用についての授業の促進や取り組みに関しては、引き続き継続していく必要がある。

IV 「教職課程自己点検評価報告書」作成プロセス

本学において、年度当初に教職課程委員会によって教職課程自己点検評価の実施が決定され、「教職課程自己点検評価報告書」（以下「報告書」と記す）の作成に向けて教職センターのメンバーで構成されたワーキンググループを立ち上げた。第2回教職課程委員会（令和7（2025）年7月2日）において、「報告書」作成のプロセスとスケジュールを確認した。各学科の教職課程における自己点検を実施した。そして、11月以降にそれらをワーキンググループにおいて取りまとめ、「報告書」としてまとめる作業を行った。FD（令和7（2025）年11月19日）で全学的な共有を行い、自己点検の取りまとめをした後、1月に「報告書」の最終的な修正等を行った。「報告書」は、教職課程委員会（令和8（2026）年2月4日）及び教職センター会議（持ち回り）で最終的な確認を行い、自己点検評価委員会並びに部局長会において、正式な「報告書」として承認された。